

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島市立庚午小学校	校長氏名	藤川 照彦	生徒指導主事氏名	大下 聡子
取組事例名		『プロジェクトX 挑戦者たち 成功させよう!!組体操』 —創造、挑戦、協力、最高の思い出を自分たちで—			
取組のねらい『個人と集団の成長』					
運動会での団体演技「組体操」への取組を、学年集団を育てる機会として活用した。1 学年 5 クラスを有する本校では、とすると、各クラスで指導の違いや活動への温度差が生じ、児童への統一した指導が難しい点がある。学年集団を育てる中で、各クラスが切磋琢磨し、クラスに刺激を与える。それは、個人にとっても学びの場である学年の環境、クラスの環境がより改善されることになり、子どもたち個人としての学習を効果的に行うことにつながると考えた。 本校では、毎年、6 年生が団体演技で組体操を行っている。児童は、運動会の最後に最高学年としての自分たちの姿を保護者や他学年児童に見せることを誇りにしている。「組体操」が特質上、児童にとって「自分」の体と心を意識すること。自分自身が挑戦する体験が可能であること。また、友達が挑戦する姿から友達への理解や共に息を合わせる体験が可能であること。土台になる児童は、みんなの為に「貢献」や「忍耐」が必要とされることから、「組体操」の取組により、児童個人の成長と共に他者と協力し、活動できる態度の伸長を図ることをねらいとし、この取組を行った。					
取組の具体的内容『児童によるプロジェクト化』					
取組期間 平成 27 年 6 月 5 日から 9 月 26 日まで ① 6 月にプロジェクト化する意義を児童に理解させ、「心に残る運動会の演技を実行委員の行動力で成し遂げよう」と投げかけ、実行委員が中心となり、「計画」「練習」「評価」を繰り返し行った。 ② 6 月中に「組体操」に向けての学年集会を持った。『決起集会』と名付け、「目的のために決意を固め、行動を起こす」ことで、学年全体の結束力を高めた。実行委員が運営し、集会の中で、各クラスの 4 月から 6 月までの成長を伝え合う場を設け、自分自身やクラスを振り返るとともに、他のクラスのがんばりを知り、学び合った。その後、それぞれのクラスで、何に取り組むかを明確にした。 ③ 6 年生全員が、同じ気持ちで練習に取り組めるような「スローガン」を各クラスで考えた後、実行委員が学年で一つに決めた。児童の気持ちを高め、個人でも集団としても取組に対して意欲が継続するように廊下に掲示した。					
取組の課題・創意工夫『指導の段階化』					
指導方針、指導計画、指導する際の教師の態度やスタンスまで共通認識を図り、5 人の指導者がぶれない指導を行うための工夫を図った。特に、児童が課題に取り組む姿勢・態度に関して指導内容を段階的に決め、『人としての成長』『学年に求められる資質』の向上を図った。 【第 1 段階：意欲の向上】技の出来、不出来の評価ではなく、そこに至るまでの過程を評価した。廊下にコーナーを設け、児童の頑張りを写真に取り、掲示した。写真を通して行動を価値づけ、前向きに取り組めるように支援した。 【第 2 段階：自主性の向上】自主性を引きあげた。自主的な集合・整列。休憩時間の自主練習 朝練習も評価した。個人・パート・部分練習等、自主的に活動できるよう支援した。自分たちで解決する課題を感じ取らせ、行動に移させた。それぞれの努力や工夫を教師が紹介し価値づけた。 【第 3 段階：粘り強さ・地道さの向上】慣れてきて、児童の気持ちが緩む時期に入る為、手抜き、ごまかし、不満で逃げる行為に対して、教員が立ちふさがり、子どもたちの心を揺さぶった。問題点や課題					

を提示し、学年団として「ゆるぎない態度」で指導した。児童には、自分自身と向き合い、自分の言葉で自分の思いを言葉に出させ、共感させた。学年集会を開き、責任をもって子どもたちに現状を修正させた。実行委員を通して取り組み本来の目的やどんな気持ちで本番を迎えるか考えさせた。

【第4段階：努力したことを成果として求める】期日に間に合わせることも必要である。計画的に練習し、不足はクラスでの補充指導を行った。

【第5段階：仕上げ】運動会前日に5年生に見せ、力を出し切って演技をさせた。運動会当日、保護者や全校児童の前で「個人の成長」と6学年としての「集団の成長」を表現した。演技直前に、応援団長が中心となり、円陣を組んだ。子どもたちの掛け声が響き、最も気持ちが高まった状態で本番に臨めた。

課題としては、時間がかかることである。児童自身にとって、組体操は心と体が一体となった活動である。第5段階に至るまでには、話し合い、試行錯誤、挫折感なども経験をさせるため、子どもたちに十分な時間の確保が必要である。その分、児童自身で到達した成果と児童が実感できる。

取組の成果（効果）『人としての成長 仲間への信頼』

「組体操」の演題を「花鳥風月」とした。児童自身の成長を表現したものである。初めは幼かった花のように愛らしい子どもが鳥のように羽ばたき始め、風のごとく荒れることもあった。そして、月のように高見から、静かに落ち着いて様々なもの見て行動できるような成長を遂げていくという構成にした。児童は自分自身を表現することで、心をも表現しようとするところまで成長した。

プロジェクト化して「組体操」に児童を参画させたことで、児童が自ら課題に取り組み、目標を達成する体験をすることができた。個人としての、自主性や粘り強さの向上と共に、仲間への理解、連携・連帯意識を高めることができた。助けたり、助けられたりする体験により、友情の深まりが見られた。

【児童の作文より】「…私の中で、『この時』というのは、友達の大切さに気付けた時でした。…『自分が落とした』ということに責任を感じ、落ち込んでいた私ですが、周りの友達が助けてくれて、部屋で一人の時にも常に支え合えるような気がしました。この時、やっと、今から変わらなきゃいけないんだと実感しました。それから練習を重ね、変わった私を見てもらいたくて、本気になりました。私が本気になれたのは、友達がいたからです。」



今後の展開『プロジェクトの積み重ね』

10月の修学旅行でもプロジェクト化を図り、実行委員が6学年として旅行先でどう行動するか話し合い、クラスに提案し、実行した。旅行先でも、実行委員を中心に、主体的に行動した。3月の卒業式でもプロジェクト化を図り、実行委員が卒業式でどのような姿を保護者やお世話になった地域の方や先生に見せたいのかを話し合い、学年とクラスで取り組む。

他校へのアドバイス『プロジェクトの継続化』

毎年必ず行う行事を通して児童に「人としての成長」と「集団の一員としての成長」を促すことが可能である。プロジェクト化は児童が主体的に取り組み、意欲を継続させることが有効である。行事ごとに繰り返し行うことで、次の行事に向け、意欲を継続することができる。